

# 仕事人秘録

川崎氏は1972年に東芝に入社し意匠部（現デザインセンター）に配属される。「音」にかかわるデザインを志願し、往年の音響機器ブランド「オーレックス」を手掛ける。

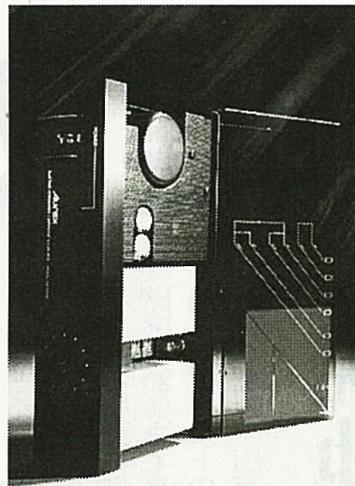
本当は電子楽器にあこがれていた。電子オルガンの「オーケストロン」をやりたいかったのだが、ヤマハの「エレクトーン」に市場を席卷され撤退してしまった。代わりに音響機器のオーレックスが立ち上がり始めていた。入社早々、オーレックスのブランドロゴの社内コンペに応募、私の案が選ばれた。

もともと理系である上、大学在学中は気鋭の美術評

## 未来の予感を形に ⑥

工業デザイナー

川崎 和男氏



東芝のオーディオブランド「オーレックス」で斬新なデザインを実現した

### 代表作、上司に黙って着手

論者だった宮川淳氏の著作を読んで影響を受けた。当初から私はデザイナーにしては論理的に対象を見つめる習慣があった。目には見えない「音」を製品に仕上げるにはどうしたらよいか。音響機器のデザインは刺激的な挑戦だった。

エンジニアや模型製作者は新人デザイナーに厳しかった。「つくれないかたち部までデザインされ、各パ

76年に手掛けたアンプ「SZ1000」などにより、川崎氏の存在はオーディオ業界に知られる。私の東芝時代の代表作の一つになった。本体の内蔵部までデザインされ、各パ

完成に3年かかった。「面白いことをやっている若手がいる」と、エンジニアが何人か手伝ってくれた。黙って進めたことは怒られたが、完成したモノを見て上司はゴッサインを出した。東芝のそんな懐の深さが私を育ててくれた。若くして「東芝に川崎あり」と言われたのも、若手にチャンスを与える気風があったからと決めた。

1ツを機能別に色分けし、音の源のディテール（細部）にこだわる愛好家は熱狂し、今でもインターネットオークションで取引されている。

当初、「SZ1000」の仕事は上司に黙って進めていた。通常業務後、会社に残ってデザインしたので、最初の2年ほどは東芝の社員のままでやってきた。2001年に私がグッドデザイン（Gマーク）の選定審査委員長になった時も東芝はいろいろ助けてくれた。私がデザインについて遠慮無く批判するに